



富士山型の教育について

川田 善正†

Education of Mt. Fuji Shape

Yoshimasa KAWATA†

最近のトレンドとして、多くの大学においてこれまでの学部構成を超えた新しい領域の学部が創立され、学際型教育や共創型教育などが盛んに喧伝されている。古くから言われていることでもあるが、最近になって文理融合教育の重要性が見直されてきている。理系の学生さんも専門的な知識だけではなく、幅広い知識・教養を身に付け、さまざまな社会課題に目を向ける知識を身につけるべき、という声がよく聞かれる。

これらの意見はまさに正当であり、現代社会の複雑な課題に対応するためには、もちろんさまざまな基礎知識、教養は身につけておいた方がよいことは論を俟たないものと思う。広範な知識があれば、今後の人生のさまざまな場面において、役に立つものであることは、間違いない。

その一方で、今後の研究者及び技術者として核となる専門知識を修得する時間は、いつ確保するのかという疑問が湧く。理系の研究者および技術者にとって、体系化され積み重ねられた専門知識を学び、その分野の専門家になるには、その分野の基礎理論の理解に集中し、課題に本気で取り組む時間が必要であるし、没頭する時間が必要である。ある分野で確固たる知識、能力を身につけるためには、その分野の課題に果敢に取り組み、解決のために時間をかけ、他のものにとらわれず思い悩む時間が必要であると思う。現在のさまざまな知識を幅広く修得することが求められる時代では、どこでその時間を確保することができるだろう？との疑念を持っている。

理系の教育として、I型、T型、 π 型教育などが進められてきた。一つの分野の専門性を高めたI型教育、一つの分野の専門的な知識や経験を軸にして、その他の幅広い領域に対しても知見を広めるT型教育、複数の専門性をもつ人材を育成する π 型教育である。

筆者は、専門教育を実践する立場として、専門性を高めるとともに、その過程の中で、コミュニケーション能力や語学力、国際文化の理解、情報処理能力、プレゼンテーション能力、プロジェクトの調整能力などさまざまな知識を身につけて、裾野を広げていく「富士山型の教育」が良いと思う。研究者・技術者としての核となる知識をしっかりと時間をかけて身につけ、その過程において、例えば共同研究による他の研究者とのコミュニケーション能力の醸成、国際会議発表・論文執筆のための語学力能力の養成、海外研修等による国際文化の理解、プロジェクト推進のための調整能力の獲得などを目指すのが良いと考える。つまり核となる専門知識を真剣に身につける過程の中で、実地による様々な体験により、必要な知識を身につけて裾野を広げていくための努力をする形である。このような形はもちろん、これまでの大学の教育現場で実践されてきたものであり、取り立てて新しい形でない。これまで研究者・技術者が現場において実施してきた教育が幅広い知識、教養を身につけるための教育であり、目先の新しさにとられる必要はないものとする。

また、研究者・技術者の個々が文系から理系まであらゆる知識を身につける必要はなく、それぞれの専門知識を持った方が互いに協力し、一緒にプロジェクトを推進するために、より良いコミュニケーションの形を模索していく、ということが必要である。各研究者・技術者は、必要であれば、自分にはない知識をもつ研究者・技術者と連携するし、協力体制を構築していく。無理に連携するための体制の中に組み込まれても、興味や方向性が一致しなければ、連携はお手伝いになってしまうし、個々の研究者・技術者の負担になってしまうものとする。

大学において多くの学生さんに対する専門教育に携わるものとして、個々の学生さんの核となる専門分野を教育することと、その過程を通して幅広い裾野を持つ学生さんを育成したいと願っている。

† 静岡大学 電子工学研究所 (〒432-8561 静岡県浜松市中区城北 3-5-1)

† Research Institute of Electronics, Shizuoka University, 3-5-1 Johoku, Naka-ku, Hamamatsu, Shizuoka 432-8561